

目次

寄稿: エコロジストとして気候変動を学ぶ	1-2 (太田朱音)	寄稿: 日本でのアカデミア就職	4-6 (重本祐樹)
寄稿: 留学体験記	3-4 (天野由莉)	連載: 人脈作りをしよう!	6-7 (村瀬俊朗)
		連載: 留学進行中(3) ~大学院 学業編~	8-9 (石原圭祐)

寄稿: 「エコロジストとして気候変動を学ぶ」

パデュー大学
太田朱音

米国大学院進学を心に決めた数年前、このニュースレターを読みあさっていた私は、自信满满でカッコいい研究や経験をしていらっしゃる執筆者のみなさんの文章に、半ば圧倒されていた。生まれてから大学を卒業するまでの23年を愛知で過ごした私には、イリノイの小さな大学で交換留学を1年経験したとはいえ、大学院留学はとて大きな壁に見えた。それでも今、小さい頃から持っている漠然とした夢を胸に、このパデュー大学で修士課程を終えようとしている私がいる。数年前の私と同じように、大学院留学を考えながらも自分にできるだろうか、と思悩んでいる方がいるかもしれない。そんな方へ、少しでも私の文章が応援になれば幸いだ。

もののけ姫から始まるキャリア

誰もが一度は見たことがあるであろう、スタジオジブリのもののけ姫。私が初めて見たのは6、7歳のとき。人間と自然の世界をつなげようと戦うアタカの姿に心を奪われた。幼い頃から東海地方の豊かな森・海・川で多くの時間を過ごした私には、将来はアタカのように世界の森林を守りたい、自然環境を守りたい、という漠然とした思いが常に心の中にあった。とはいえ、21世紀の先進国日本では、弓矢を持って森へ戦いに行くこともなければ、どこかの一族の長にロビー活動に行く訳でもない。とりあえず大学に行ったら現実的な選択肢が得られるだろうと考え、名古屋大学農学部の森林を勉強する学科に入った。“世界の”森林というからには英語を学んで国際的な経験をしよう張り切った学部生活の末、将来は国際機関または国際協力分野で環境問題に携わりたいという夢を持った。修士号は有利になるが、博士号は必ずしも必要ではなく、就業経験が必要な場合も多いため、交換留学をしてある程度勝手の分かる米国の修士課程に進学し、その後働き始めようと思った。

気候変動×エコロジー

私が修士課程をするのに選んだのはパデュー大学のDukes Labだ。パデュー大学といえば工学系に強いが、農学分野も盛んだ。分野は端的に言えば、気候変動は生態系にどのような影響を与えるか、というテーマで、長期的な気候予測に基づいて気温や二酸化炭素濃度や降雨パターンをフィールドやラボで調整し、植物や土壌にどのような影響が出るかを研究する。Dukes教授はPurdue Climate Change Research Centerのディレクターもしており、多方面から学生が集まる。フィールドやラボでの実験に基づいたEcology/Biologyの他、気象学方面から水・炭素・窒素循環をモデルする学生もいる。対象も、植物のほかガスフラックス、微生物、ミクロ的な物質循環 など多様で、気候帯は熱帯から温帯、生態系はプレーリーからアグロエコシステムまでと様々だ。度々開催される気候変動のセミナーでは、政治学や社会科学、ジャーナリズム、気象学、農学など多岐にわたる観点から学べる。



Fig 1. 同じ学科の愉快的仲間たち。

名古屋大学では社会科学系のラボに所属していたため、Purdueに来た時は正直Ecology分野でどう研究するのかなど私は全くわかっていなかった。竹中育英会の支援のおかげもあってTAなどをする必要がなかったため、1学期目を使ってみっちり統計基礎と研究デザインの勉強、また論文の読み込みをすることができ、どうにかそれらしい実験計画ができた。私の研究は上の例でいくと、気候変動:降雨パターン、対象:植物&土壌のガスフラックス、気候帯:温帯、生態系:アグロエコシステムだ。やはりこの分野での難点は、土地が違えば土壌も違う、新しい場所ではその土地の自然を知らなければいけないことだ。土地利用や地質、植生、土壌の種類、気候と季節の関係、生息している生き物や中西部ではハンティングや農作業などの時期も考慮しなければいけない。そうすると文献で読むよりは人に聞いたり、実際に見に行く方が分かりやすいことが多く、実験計画には結構な時間を費やされた。ここインディアナ州では大規模農業が元々の生態系(プレーリーや森林)の90%以上を壊した歴史があり、さらに農地は気候変動の原因となる温室効果ガスを多く排出するので大規模農業は私たちの分野の敵のようなものだが、農業が盛んなおかげでパデュエーの農学部も栄えており、Restoration Ecologyや気候変動という分野も確立されているので、なんとも複雑な状況だ。



Fig 2. フィールドに行く際にいつも通る裏道。

私の研究はほぼ個人プレーだが、その傍で他のグループプロジェクトで取り組んでいる。Dukes Labの他の院生仲間と、欧州にいるポストドクとで論文を書いており、ほぼ完成に近づいてきた。最初に取り組んでいた内容は、始めてすぐに全く似た内容の論文が出版され、みんなで途方にくれたものだが、方向転換を経て、なんとか形になってきた。教授も私たちのアイデアを気に入ってくれ、完成を楽しみにしてくれている。First Authorに抜擢された私は、自分のThesisと並行してひたすらWritingに励む毎日だ。教授に雇われず、自分のファンドで来た私は、必ずしも教授の持っている大きな研究プロジェクトなどに携わったわけではないが、自分の研究を自分で終え、またグループでのプロジェクトでいわゆるリーダーシップの経験もすることができ、バランスの取れた修士課程だったのではないかと思う。

仲間たち

似た者同士は集まるといいますが、同じ学科の仲間達は自然が好きで、アウトドアでエコな人が多い。Dukes教授も含め多くの教授・院生は大学まで自転車通勤をするし、ベジタリアンまたはホワイトミートしか食べない人も多い。遊びに行くとなれば都会ではなく森にハイキングに行くし、スポーツも楽しむ。天気の良いときはlab meetingやランチタイムは外の芝生の上だ。〇〇をする人に悪い人はいないとはよく言うが、自然を愛する人の集まるこの学科で、私は本当に仲間や先生に恵まれている(Fig 1)。また、私はここ半年ほどボルダリングにハマってしまい、研究の合間を縫ってでも大学のボルダリングウォールに2日に一度は通っている。パソコン漬けで凝り固まった体をほぐし、自分の学科外で友達ができるので、とても良いリフレッシュになっている。

エコロジストとして

半年後の卒業に向けて現在は米国で就活をしている。日本ではなかなか自然を相手にする職というのは少ないイメージだが、米国ではEcology系のコンサル会社や研究機関、シンクタンク、非営利団体、また環境系の会社でEcologistを募っているところも多い。BiologistやSoil Scientist、Data Scientistなども視野に入れている。ただ、こちらで修士2年間を過ごして、もっと学んでみたいこと、研究してみたいことが見つかり、博士課程も視野に入れている。卒業後少し働いてから博士課程に進学する道も探りつつ、フレキシブルに生きていきたい。65歳まで働く時代なので、まだまだ夢を叶えるチャンスは30代、40代になっても十分ある。

パデュエー大学の位置するWest Lafayetteは小さな街だが、多様な木々や可愛い鳥やリスたちを毎日目にできる素敵な街だ(Fig 2)。研究や将来のことを考えているとどうしても初心を忘れがちだが、森や海や土が、私たちが住む環境をきれいにしてくれていることを思い出させてくれる。研究経験がほとんど無かった私が大学院留学を実現できたのも、Dukes教授と竹中育英会のみなさんが私の思いを応援してくださったおかげであり、本当に感謝してもしきれない。これからも、たまにはもののけ姫を見返して初心を忘れないように心がけたい。



太田朱音
Purdue University
Department of Forestry and Natural Resources

寄稿: 留学体験記

私は現在、ジョンズホプキンス大学歴史学部の博士課程で勉強をしています。2015年の秋にフルブライト奨学生としてこちらにやってきて、今年ようやく三年目を迎えました。大学があるメリーランド州のボルティモアという街は、ホワイトハウスのあるワシントンD.C.から、電車で約一時間の距離にあります。一般に治安の悪いところだと言われていますが、長い歴史を持つ港街で、いわゆる大都会ではないものの人々の生活が息づく、温かい街です。日本では、野球チーム「オリオールズ」のホームとして知られているかもしれませんが。

ジョンズホプキンス大学での研究生活

私は大学卒業後、しばらく日本の大学院で北米と大西洋の歴史を研究していました。その後、研究の本場であるアメリカの大学で歴史学の体系的なトレーニングを受けたい、と思いたち、留学を決意しました。私が留学したジョンズホプキンス大学は、19世紀末にアメリカ初の研究大学院として設立されました。その伝統からか、私のいる歴史学部では教授と学生が協働し、互いの研究分野に貢献し合おうことを目指す空気が色濃く感じられます。博士課程のトレーニングでも、授業で知識を「教わる」ことよりも、セミナーといわれる意見交換の場で、互いの研究について建設的な質問をし、自分なりの貢献をする力を養うことが重視されています。ジョンズホプキンスの歴史学部には、授業のほかに「ジェンダー」「大西洋史」「アメリカ史」など、研究分野ごとのセミナーがあります。ペーパーや博士論文を執筆する過程で、私たちは複数のセミナーで原稿のプレゼンテーションを行い、教授陣や他の学生からたくさんの助言をもらいます。同時に、教授や他の学生のペーパーを読み、その執筆過程に貢献することも求められます。私はこうしたプロセスから、自分や相手の仕事に「完全」であることを求める間違い探しの姿勢ではなく、発展途上であるその研究がどうしたらもっと面白くなるか、どうしたらもっと大きな文脈につなげることができるか、共に考える創造的営みの豊かさを学びました。



Fig 1. ジョンズホプキンス大学 ホームウッドキャンパス

博士候補生になるまで

私の学部では、二年次の終わりまでに自分の研究関心に合わせた四つの分野でcomprehensive examと呼ばれる総合試験に合格し、博士候補生になることが望めます。私は、留学先では日本で勉強することができなかった分野にチャレンジしたい、と考えていたので、一年目にはかねてより興味をもっていた近代医学史に挑戦することにしました。二年目には、自分のメインフィールドであるアメリカ史とジェンダー史に加え、アメリカに来てから関心を深めた日本近代史に挑戦することにしました。試験では、ひとつの分野で60冊ほどの文献を読破し、研究史を把握することが求められます。膨大におもえる課題の量に、はじめはどうなることかと不安に思っていました。各分野の担当教授とミーティングを重ねるなかで、なんとか課題を消化していくことができました。特に二年目は授業と平行して毎日たくさんの文献をカバーしなければならず、しばらくは家と図書館をひたすら往復する日々でした。一冊一冊を丁寧に読むことはできませんでしたが、読んで読んでまいち達成感がなくて、不安になることも多くありました。それでも不思議と、量をこなしていくうちに自分の学問的な土台が固められていくような感覚がありました。専門家が前提にしている研究史を共有できるようになったからだとおもいますが、それはなかなかいいトレーニングだったように感じています。常に課題に追われるせわしない毎日ではありましたが、時折同級生と集まって愚痴をこぼしあったり、ボルティモア名物のカニを囲んでたわいのないおしゃべりに花を咲かせたりしたのも、良い思い出です。

ティーチング

試験を終えた三年目のいま、私は博士論文の執筆準備をはじめています。今年からはティーチングもはじまり、学部生向けの授業の補佐を務めています。私が担当しているのは、植民地時代から20世紀までのアメリカ史を概観する授業です。週二回行われる教授のレクチャーを補足する形で、週に一度私たちTA(teaching assistant)がディスカッション形式の授業を行います。私のセッションは、一年生の受講生が多いので、歴史的資料の読み方や、論理的な議論の組み立て方、アカデミックライティングの基礎などを学んでもらえるように、様々なアクティビティを毎週用意していきます。先学期は、図書館のスタッフをお願いして、ジョンズホプキンス大学が保有する一次資料を用いて、史料を時代背景に位置付けて分析するワークショップを行いました。18世紀に書かれた手紙や、19世紀の楽譜、奴隷取引の記録など、実際の歴史資料に触れることで、学生たちにも授業で扱っている時代をもっと身近に感じてもらえたようにおもいます。はじめてのティーチングは、まさに試行錯誤の繰り返しでしたが、やりがいはありました。最近になって、受け持っていた学生の一人に、学外のプログラムに出願するための推薦状を依頼されたときは、いつまでもどこか学生気分だった自分が、いま教える側として学生の人生に影響を与える立場に立っていることを実感し、身が引き締まるおもしろいがありました。その学生に、いままでで一番楽しかった授業だった、と言ってもらえた時

は、とても嬉しかったです。ディスカッションでの効果的な質問の投げかけ方など、まだまだ学ばなければならないことがたくさんありますが、博士課程での学びをとおして、これから少しずつでもティーチングのスキルを磨いていけたらとおもいます。

アメリカで勉強するということ

私がアメリカに来た年は、ちょうど2016年の大統領選に向けて選挙活動が始まったころでした。当時は、同級生と集まって各政党のテレビディベートを見たり、学内の政治集会に出かけてみたりして、選挙戦に興味深く見守っていました。2016の11月、大方の予想に反してドナルド・トランプ氏が当選した日の衝撃は忘れることができません。ジョンズホプキンスはリベラル派が支配的な大学で、選挙戦中は「トランプ支持者を肉眼でみたことがない」と冗談を交わしていたほどでした。開票結果が出た翌朝は、キャンパスが異様に静まり返り、学生たちの多くが意気消沈していました。学長から全学生に向けて、心のケアを怠らないように、と注意勧告のメールが送られたりもしていました。実際、トランプ氏の当選は、アメリカという国の進歩や可能性を漠然と信じて来たリベラル派の学生たちの希望を粉々に打ち砕き、そのひとりひとりに個人的なダメージを与えた出来事でした。しかし一方で、トランプ支持層とリベラル派の深刻な断絶、公の場で儀礼的に守られてきたポリティカルコレクトネスの危うさ、そしてアメリカ社会に根深く残る性差別や人種主義が、明るみになった出来事でした。



Fig 2. トランプ大統領就任式の翌日、ワシントンD.C. Women's Marchにて

トランプ大統領の就任式の翌日には、同級生と誘い合っ、D.C.で行われた大規模な抗議集会に出かけました。当日の朝は、D.C.行きの列車に乗ろうとする人たちがボルティモアの駅に集中し、駅舎に入りきれない人々が長蛇の列をなしていました。列車を待つ間にも、デモに参加する様々な背景をもつ人たちと会話を交わせたのは良い経験でした。色とりどりの仮装やプラカードを準備してお祭りのように盛り上がる多くの参加者を尻目に、静かに佇んでいたアフリカ系女性がそっとこぼした言葉を、私は忘れることができません。「私たちは次の4年を生き残れないだろう。」小さな女の子を持つシングルマザーの女性で、自分の娘がこの国でこれから経験するであろうことを想像すると恐ろしくてたまらない、と不安げに話してくれました。「トランプが当選するようなこの国で、私はデモに出て来るのだって恐ろしいの。でも娘のことを考えると、声をあげずにはいられなかった。」これまで様々なトランプ批判の論説に触れ、落ち込む同級生と慰めあったりしてきたけれど、このとき話をした女性のように、本当の意味で危険にさらされていく人たちの生身の痛みを、自分がどれだけ理解していただろうかと、はっとさせられました。

ジョンズホプキンス大学で勉強を始めてから約3年。大変なことも随分ありましたが、こちらに来て得たものはたくさんあります。大学の勉強だけではなく、ボルティモアという街で生活し、こちらのテレビを見たり、人と話をしたりするなかで、本からでは学べなかった、アメリカという国の抱える問題や政治文化について理解を深めることができたようにおもいます。以上、私のささやかな体験談ではありますが、これから留学を志す方を少しでも後押しできたら幸いです。



天野由莉
Johns Hopkins University
History Department

寄稿: 海外留学を経て、日本でのアカデミア就職

この記事が刊行される頃には、私は4年以上暮らしたイギリスを離れ、富山県で大学講師としての新生活を送っている事かと思えます。本稿を寄稿するにあたり、米国大学院学生会より賜ったテーマが「海外留学を経て、日本でのアカデミア就職」というものでした。いざ書き出してみると、中々どこから手をつけてよいものやら。

兎にも角にも、まずは私のバックグラウンドから説明させていただきます。生まれも育ちも愛知県、大学進学に伴い、初めて県外へ出ました。学歴は2011年立命館大学経営学部卒(学士(経営学))

、2012年オックスフォード大学ニッサン日本問題研究所修士課程修了(修士(近現代日本研究))、2018年ケンブリッジ大学工学部博士課程修了(博士(工学))、そして2018年4月より、富山国際大学現代社会学部にて、マーケティングの講師を勤めさせて頂いています。また、2017年に共同設立した(株)職人たちのいる処にて、取締役兼デザインマネージャーの職も拝命しております。私の経験が、皆様の海外留学や就職に関して一助と成ればとても幸いです。

富山国際大学
重本 祐樹

筆者の研究領域について

多くの読者の皆様が、各大学での私の学位を見て「何を研究しているの？」と首を傾げていることかと思えます。私の専門分野はデザインマネジメントです。デザインマネジメントは、経営学分野の中のいちテーマとして扱われて、“デザイン”を巡る学識そのものを追求、体系化する事を目指すデザイン学に立脚し、ビジネスにおけるデザイン事象や、実践的展開を研究しています。とりわけ私の領域は、マーケティング(人が欲しいもの)と工学(人が作るもの)を結ぶ位置付けであると考えています。

学部では日英の茶飲料マーケットの文化的比較考察、修士では革新的なデザイン力に優れた日本のものづくり起業のケーススタディを、そして博士では(1)異なる社会文化的背景を持つ消費者グループ間における、特定の製品印象に対する認知パターン、および(2)それらの認知とデザイナーが意図した製品印象との合致度合いを測量・比較する手法を研究開発しました。これらの研究内容をご覧頂ければ、先の様な学歴ルートを辿る事になったことも、比較的納得して頂けるかと思えます。



Fig1. 筆者が2018年4月より勤務している富山国際大学(東黒牧キャンパス)

就職活動概要

さて、斯様な背景を持つ私の就職活動につきましては、2017年10月に本格始動し、日本で6校、海外で6校(イギリス、オランダ、スウェーデン、デンマーク、フィンランド)応募、また1校お誘い(イタリア)を受けました。結果として、12月に富山国際大学からオファーを頂き、今年2月にオファーを承諾、採用が正式決定しました。本稿を執筆している3月現在、まだ数校結果が出ていない大学もありますが、今の所富山国際大学以外は書類審査で落ちています。

研究分野の視点から見れば、13校中デザインマネジメントでの応募が1校、経営学分野で専門は何でも可で1校、残りはデザインマネジメントと親和性の高いマーケティング、製品開発、イノベーション論、組織論といった周辺分野での応募でした。こうした背景には、“デザイン”がまだ学問の対象と捉えられていない現状もあり、研究領域として発展途上のデザインマネジメントで職を探す難しさは感じました。しかしながら、富山国際大学のマーケティングの授業やゼミでは、デザインマネジメントの知見を織り込んで構成

してもよい、と手厚いご理解を頂き、自身の分野での研究・教育活動に高い自由度を与えて下さった事に感謝しています。

就職先選びの私的基準

博士課程も終わりが見え、就職活動を開始するに迫り、自分の中で譲れない基準がありました。それは「日本ないし欧州の田舎にある大学への就職」です。日本ないし欧州というのは、デザインマネジメント研究のトレンド、及びそれらの教育や実践の必要性からの選定です。また、感情論的に言えば、愛着がある国であるということもあります。私の把握する限り、世界のデザインマネジメント研究の二大巨頭はデルフト工科大学(オランダ)、ミラノ工科大学(イタリア)であり、この二校のデザインに対するアプローチは、今の私の研究関心とも一番合致しているかと思えます。次点で出身校である立命館大学、ケンブリッジ大学と言った所でしょうか。博士課程で分かって来た事ですが、ケンブリッジは英国内における地位もあいまって、工学、製造業の分野では、政府の政策関連の研究や、実践的かつ即時的な成果を出すような研究が優先される、または優先的に予算を分配される傾向にあるようです。そのため、製品開発、モノとヒトのインタラクションといった分野に割かれる力は限定的です。こちらに関しては、後述で詳しく触れます。

私にとって、田舎にある事、また企業でなく大学である事というのは、ある意味これは国選び以上に大きな基準であったと思います。昨年、都内のコンサルティング会社で2ヶ月間インターンシップを経験し、自分の時間を自分でコントロールできない事、1日中デスクワークをしなければいけない事(=少しの運動もできない事)が、とてつもない苦痛だと実感しました。アカデミアであれば、1日のスケジュールを比較的自由に組めるため、こうした問題は解消されると期待しました。また、インターン後も、他の研究プロジェクトなどもあり半年ほど東京住まいを継続したのですが、都会暮らしが合わなかったらしく、ほぼ常に体調不良、頭も回らない、いい仕事など出来るはずも無く、給料に見合うパフォーマンスも発揮できないな、と痛感しました。雇用先にとっても私にとっても、誰も得をしない、とはっきり分かり、この時点でアカデミアに残り、そして田舎に行く事を決めました。



Fig2. 取締役兼 デザインマネージャーを勤める(株)職人たちのいる処 運営会議(夕暮れ時の琵琶湖畔にて)(右が筆者)

就職先選定基準の理由

上記の基準を設定した根本的な理由ですが、一言で申し上げると、私は日に何度か、筋トレとランニングがしたいのです。1日8時間(以上)仕事をするのは問題ないのですが、それを2,3時間のいくつかのスロットに区切って研究や教育業務を行いたく、この間に1時間程度のジムやランニングを挟むことにより心身共にリフレッシュし、各スロットの生産性、創造性がぐんと上がります。

これらに関しては、「確かにアカデミアに行く理由は分かるが、都会でも可能ではないか?」という疑問を抱かれる読者の方もおられるかと思います。しかし、都会の空気や水の鮮度、騒音や人々のストレス感の中だと、どうしても外に走りに行く気が起きず、また一服のお茶が美味しくないのです。都会の全てが嫌いという事はありません、ときどき訪れるのは刺激的で面白いのです。ただ、田舎育ちの私にとって、大都市で長期的に住まうことは受け付けられませんでした。もちろん、これはあくまで私見なので、田舎の空気感の方が不快、食べ物も水も都会と変わらない、不便、など感じ、私は都会の方が好き、といった意見をお持ちの方が居られてもなんら不思議ではありませんし、個人の意見として尊重されるべきだと思っています。

余談

さて、先程ケンブリッジの製造研究の傾向について少し言及しましたが、所属ラボの教授とお茶をしていた際、政府や国際機関の製造業へのポリシーや予算配分に即さない研究がほとんどできない、とこぼしていました。すなわち、長期的な視座での研究、純粋な学問としての研究が進まないということです。これは私も日本のアカデミア、および産業界のイデオロギーに感じていた事です。端的に言えば、今の日本企業や政府が求めているのは問題解決の“方法”であって“方法論”ではないのです。どこかの寓話ではないですが、不漁な釣り人が、隣にいた熟練の太公望に、その釣り竿を譲ってくれ(しかも限りなく安く)と言っているようなものです。その釣り名人の釣果の背景にある釣り竿の構造や釣り方のテクニク、また気候条件や魚の習性などへの知識や経験則と言ったものを無視し、その結晶である釣竿(結果)だけ欲しいというわけです。これはひとつの戦略の在り方として否定しませんが、長期的な視野に立つのであれば、同時進行で自分たちの「釣り方法論」を探究

すべきなのです。しかし、その方法論に目を向ける事なく、その結晶としての釣り竿を手に入れた時点で満足してしまっている、というのが私から見た日本のアカデミア、産業界の現状で、当たらずも遠からず、と思料しています(もちろんこれに当てはまらない方々も居ますが)。

したがって、仮に一時的によく釣れる様になっても、少し条件が変わっただけですぐに不漁に逆戻り、更に悪い場合には、その釣り竿を使いこなせずに不漁のまま終わり、騙されたと嘆く、といったことも十分に考えられます。すなわち、状況を自力で打破する知の蓄積がないのです。とりわけ、デザインに関しては、その言葉のトレンド性のみが先行してしまっていると痛感しています。(日本に限った事ではないですが、日本は特に顕著かと思います。)こうした現状を少しでも改善することに貢献できるよう、(少なくとも)向こう数年間は拠点を日本に移し、デザインマネジメントの研究、実践、教育に邁進して行く所存です。しかし、競うフィールドは世界で。拙稿を読んで頂いている皆様には、是非もっと外の世界を見て、体感して欲しいです。世界には見た事も無い景色も、美味しい物も、チャンスもごろごろ転がっています。

以上、私がイギリスでの修士、博士生活を経て、日本でアカデミックポストを得るに至った経緯です。これらの情報が少しでも皆様のお役に立てれば幸いです。最後に、本当に余談ですが、富山国際大での面接のため現地入りし、その日の夕食にと入った地元の居酒屋で食べた寒鰯と日本酒の味は、結構決断に大きな影響を与えました(ミラノのピザとワインも捨て難かったですが)。



重本 祐樹

富山国際大学 現代社会学部 講師

リンク: http://www.tuins.ac.jp/society/teacher_shigemoto_yuuki.html

早稲田大学
村瀬俊朗

連載: 人脈作りをしよう!

「留学すると日本で教員の職に就けなくなるらしいよ」

こんな噂をあなたは耳にしたことがあるかもしれない。果たして噂は真か。良い研究を行うことが就職に有利なことは言うまでもない。「しかし、研究を頑張っているあの人は、なぜ日本の大学に応募しても通らなかったのか」とあなたは思う。研究と並行してやるべきことは何だろう。私は就職活動で地味に重要な要因は「人脈」と考える。就職したい土地で長年時間をかけて人間関係を培

うことは就職に影響を及ぼす。しかし海外にいと国内の人脈作りが難しい。この記事では「人脈」作りと私の方法について語りたい。

話を始める前に軽い自己紹介をしよう(かけはし二一号も共に参照)。私は組織心理学を専門とする早稲田大学商学部の准教授である。高校を卒業した97年に渡米し、博士課程とポスドクを含むすべての高等教育を米国で修了した。当たり前だが、日本の大学のゼミやラボはおろか、大学院にさえ所属した経験はない。そして、私は周りに助けられてキャリア形成をしてきた。現在も様々な

お仕事を知人・友人を介して受けている。今まで行ってきた人脈作りを振り返って、私の独断と偏見とn=1という個人的経験から語らせて欲しい。本題に入る前に、この記事で誤解されたくない点について私の考えを明確にする。人脈作りは絶対に良い研究をとってかわるものではない。良い研究に勤しんでいる皆さんをこの記事の大前提とする。

あなたは周りに認知されているか

私たちは知らずしらずのうちに人脈づくりをしている。勉強会や学会で研究発表した時、飲み会の席で他大学の教員や院生と意見交換した時、アドバイザーや友人と共にするランチやディナーの席で、私たちはコネを作っている。ジョブ・マーケットの時期に、この人脈は効果を発揮する。考えてほしい。品質は高そうだが知らない商品よりも、見聞きした商品のほうが馴染みが深い。「知っている・聞いたことがある」という経験は、その対象に対して好意的態度を生む。あなたの研究発表を聞いたことがある。あなたの人となりを知っている。あなたと立ち話をしたことがある。この一つ一つの経験は、あなたという商品の親しみやすさを植え付ける。

あなたは現在海外に軸があり、日本での就職も考えていると仮定する。どのような人脈づくりが最適かは海外と国内の学術コミュニティの統合度合いによる。国内研究者が海外学術雑誌に頻繁に投稿し、最新の業界の動向にアンテナを張ることは必須であり、多くの国内研究機関の科学者が海外の学会に参加する。このような特徴は、国内・外のコミュニティ統合性の高さを示し、コネ作りを分ける必要性を小さくする。一方で、科学コミュニティが国内・外で分断されると、国内の人脈作りは海外とは別に意識しなければならない。そのような構造を持つ国内コミュニティでは、海外の論文や学会発表が必ずしも国内の存在感につながらない。海外の情報が国内に浸透され難いのだ。分断された国内コミュニティでも海外の人材に興味がある。特にこの傾向は近年顕著になっている。例えば、一部の大学は常に良い若手を探している。しかし、国内の人材の把握はできても、海外の若手研究者に上手くアンテナが働かない。海外では、様々なところで若手が活躍しており、そのすべてをカバーすることができないのだ。そして、あなたという人材の情報も伝わり難いのである。

あなたの情報を浸透させよう

留学先のボスはその地域のマーケット戦略にはある程度あたりがつく。しかしグローバルに著名なボスでも、国内マーケットの就活戦略を理解していない。日本で大学院に所属し、国内にメンターの存在がいれば彼らの意見を聞こう。もしあなたにメンターがない場合は、自分で動かねばならない。そこでいくつかの私のテクニックを紹介したい。

まず関係性はすぐには作れない。コネ作りの一番の落とし穴は(コネ作りでまずありがちな動き方は)、コネが必要になって初めて必要な人物に対して行動することだ。我々は日々の忙しさもあり人脈作りを面倒臭がってしまう。しかし、関係が熟成するには時間が

かかる。あなたが就活を意識していない時こそ、相手も深読みせずリラックスでき、お互いが自然体になる。もしあなたの就活がまだ先であれば、今こそ人脈作りを始めるべきだ。

次は「海外学会」で国内研究者を捕獲せよ。あなたは国内学会で国内研究者と話そうとしている。しかしこの手法はあまりお勧めしない。国内研究者は国内だと実は捕獲が難しい。海外学会に来る人であれば、現地の研究者から生情報を得たいので話しやすい。海外では「日本人同士」という心理的状态が生まれる。そのうえ、海外学会では知り合いも少なく心細い(可能性が高い)。国内学会で日本人とコネを作ろうとしても、周りはほぼ全員日本人同士で固まっており、彼らにはすでに友人や学生たちとの約束があるため忙しい。故に、国内でのあなたの魅力は相対的に低下する。やはり国内研究者は海外で捕獲(ゲット)だ!

3つ目は「将を射んと欲すれば先ず馬を射よ」。あなたは直接偉い先生に話そうとしないだろうか。あなたは他のポスドクや院生と積極的に話しているだろうか。彼らはまだ無名なので話しやすい。その後、彼らのボスに紹介してもらおう。知人に紹介されたほうが、断然著名人のガードが下がるので話しかけやすくなる。更に忘れて欲しくないのが、ボスの周りにはポスドクや院生こそがダイヤの原石であり、未来の重要なプレイヤーなのだ。有名になる以前に知り合ったほうが断然有利である。ダイヤばかりではなく、ダイヤの原石も探そう。

4つ目はかたまて話しているグループこそチャンス。話の輪に入るのは確かに難しい。しかし、これはチャンスのかたまりなのである。一人と知り合うと、一気に他の人と知り合える可能性が高まる。また、彼らがランチやディナーに行く話をしていたら、「私も連れて行ってください!」と声を挙げてみよう。

日本の大学はあなたを求めている

あなたには追い風が吹いている。グローバル化の影響により、日本の大学は、研究力に加えて、英語や他の言語で専門授業を担当できる人材を欲している。つまりあなたを必要としている。研究に関して留学先で切磋琢磨しているのと言うまでもないが、人脈を作ると、あなたという商品の価値がその土地でいっそう分かりやすい。知らない人に話しかけるのを苦手と感じるかもしれない。しかしこう考えてほしい。あなたという商品を知ることは、相手にとっても幸せなことなのだ。



村瀬 俊朗

早稲田大学 商学部 准教授

University of Central Floridaで博士号(産業組織心理学)を取得
Northwestern University及びGeorgia Institute of Technology ポスドク研究員
Roosevelt University 助教授を経て、2017年9月より現職

前回はボストンでの大学院時代、一つ屋根の下、共同自炊生活を送った話について書いたが、今回は学業と研究について書く。

アメリカの生物学専攻

自分は学部では化学工学を専攻していたものの、大学院は生物科学のPh.D.プログラムを志望した。一つ目の理由は単純で、学部時代のショウジョウバエの発生の研究に魅せられ、生命の不思議をもっと理解したいと思ったからである。

二つ目の理由は、大学院における工学部と理学部のカリキュラムの違いである。一般的に工学部の初めの2年間は授業と課題に追われ、その内容は学部の必修科目を修士レベルでやり直すものが大半で、アメリカの学部課程で存分に座学はやったので、研究に打ち込みたかった¹。理学部のカリキュラムは概して工学部よりも必修科目が少ない。自分が入学したシステム生物学専攻は極端な例で、「入学者のバックグラウンドが多様すぎるので、必修科目ゼロ、各々が自分に必要だと思う科目を6つとるべし」という賛否両論の超リベラルな方針だった。そしてアメリカの生物学専攻には、独特のローテーション制度がある。大学院の初年度は、数ヶ月ずつ違う研究室3つほどで試しに働いてみて、その上で2年目博士研究を行う研究室を決めるのである。一つの研究室に所属するだけでは得られない幅広い知識、実験技術、学内ネットワークを得て、自分と相性のよい環境を探す、とても贅沢な時間である。博士課程で研究室に入れば5年程はその研究室の人たちと仕事をしていくことになる。メンバーは入れ替わりがあることも考慮して、最初の数年間基礎技術を学べる先輩がいるかどうかのポイント。指導教授とは卒業後も続く関係を築ければ最良である。無論、そこまで先のことについて大学院初年度に判断するのは難しいが、そういう時こそ自分の直感に素直になっていいと思う。

ローテーション制度を可能にしているのは、お金の事情がある。アメリカの生物学Ph.D.プログラムでは、合格時点で研究室は決まっておらず、大学院生の最初の2年間の授業料と生活費は、学科やPh.D.プログラムが負担している場合が多い。いわゆるよいPh.D.プログラムとは、NIHのトレーニンググラントを獲得することによってアメリカの国籍や永住権を持つ学生を支援し、外国人国籍の学生は学科の裁量で用途を決める寄付金などを財源としたソフトマネーで雇用される。ソフトマネーが多いところほど外国人大学院生に合格がしやすいのだろうが、これを出願者が見分けるのはとても難しい。学科やプログラムの卒業生に、外国出身の学生が多いがどうかを調べるくらいであろうか。

1ミリメートルの細胞生物学

さて自分の場合、ゼブラフィッシュの発生生物学をやる気満々で入学し、その分野の大部教授と若手教授の研究室で二ヶ月ずつ働いたが、感覚はまずまずだった。そんな中、友達の友達がカエルの卵を潰してその中の液体を顕微鏡で見るという、風変わりな研究をやっていることを聞きつけ、興味本位で二週間だけのローテーションをとりつけた。それが思いの外面白かったのである。

カエルの卵母細胞は、直径1.2ミリメートルの巨大な細胞である。長さにして人の皮膚細胞の百倍、体積にして10万倍も大きいのである。その巨大な細胞が、受精後、分裂を繰り返してオタマジャクシになるというのは、中学でも習う現象である。肉眼ですら分裂が観察できるため、この現象については全て理解されていると思いがちだが、その細胞内部で何が起きているかは、突き詰めるとわからないことだらけであった。細胞がどのようにして自身の中心を見極め、分裂平面を決定するか、巨大な細胞特有の問題はなにか?その真相には、微小管星状体という放射状の構造が、細胞分裂の度に形成・破壊されるドラマがあった²。分子が自己組織化して細胞を作るというテーマは、物理化学、そして顕微鏡観察が好きな自分にとってはうってつけであった。二週間のローテーションの間に達成したことは特になかったが、これがきっかけとなり多くの疑問が湧き、この研究テーマで博士号をとることにした。

研究室のカエル班は、毎年夏の二ヶ月間、ウッズホール海洋生物学研究所へ移動し、そこでは教授夫妻もピペットを握り実験をするのである。今日はなにが見えた、今度はこれをやりたい、今日はカエルが卵を生まなかったので海で泳いでくる、など完全に生物学者のサマーキャンプなのである。心からサイエンスが好きで、科学の日々を生きている教授夫妻が顕微鏡に向かうその背中を見つつ、そして他大学のグループと研究スペースと生活を共にした夏は大学院生活の中で特別な時期だった。ボストンとウッズホールで得られた微小管星状体の形成に関するデータは一つの論文としてまとめ、博士課程の後半ではボストン大学の若手理論物理学者に師事し、現象を説明する理論を構築した。独立してまだ2年ほどの兄貴的存在の彼は、指導教授とは好対照で面倒見がよく、大学院時代に違ったスタイルの2人の指導者と仕事できたのは、とても幸運だった。

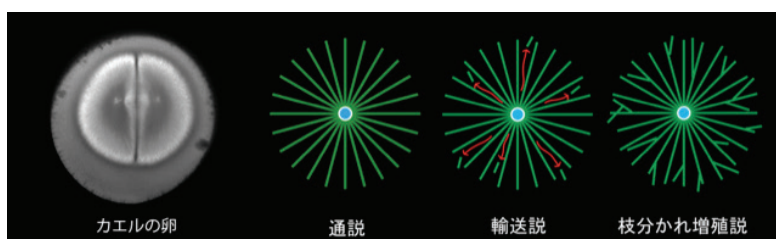


Fig 1. 筆者の博士時代の研究内容。(左) 分裂時のカエルの卵の中を覗くと、一対の微小管星状体という構造が見える。(右) 1ミリメートルにもなるこの巨大な構造がどのように形成されるか、複数の説が考えられるが、枝分かれ増殖説が有力であることを示した。

博士課程を終える段階で、初年度に受講した応用数学の授業の教授と話す機会があり、なぜ彼が物理から生物まで実に多岐に渡るテーマで仕事ができるのかを聞いてみた。驚くことに彼の考え方は、「必ずしもテーマを決めて人を探すのではなく、この人いいな、と思ったら、その人と一緒に仕事するためにはどういうテーマを設定するか」であることを教えてくれた。自分も大学院時代の研究を振り返ると、サイエンスの面でも人間関係でも色々なことがあった。全く成果が出ずお蔵入り、というテーマもあれば、予想よりもうまくいったものもある、後者はいい人を見つけれられた時におこる場合がある。研究人生なにがおこるかわからないものであるが、自分のテーマへの興味、そして他の研究者への興味、そういった感覚を大切にしたいと思う。

注釈)

1. 出願を検討している大学院の必修科目のシラバスを事前に調べておくことを勧める。MITのOpen Coursewareなどを使うと、様々な分野の基礎知識が俯瞰できる。
2. 研究内容を2分の動画にまとめたものをご覧ください: Science Sketches Video abstract: How do microtubule asters grow to fill huge frog eggs? (<https://www.youtube.com/watch?v=jfA2S-fE9U>)



指導教授との写真。所属研究室が学科のハッピーアワーを企画した際、スコットランド出身の彼は、家に代々伝わるキルトを着て Scottish Country Dance を教えていた。

石原圭祐

プリンストン大学化学工学科卒業
ハーバード大学システム生物学博士課程卒業
マックスプランク細胞生物学遺伝学研究所、ポスドク(現職)
マックスプランク複雑系物理学研究所、ポスドク(兼任)

米国大学院学生会 <http://gakuiryugaku.net/>

【ニュースレター編集部】

高野 陽平 辻井 快 佐藤 拓磨
松島 和洋 塚本 翔太

newsletter@gakuiryugaku.net

執筆者を募集中!

編集部では、ニュースレターかけはしに掲載する記事を執筆してくれる方を募集しています。ご興味のある方は、上記のメールアドレスにご連絡下さい。また当学生会の他の活動(留学説明会など)に興味のある方は、当会の学位留学経験者オンライン登録システムに参加お願いします。<http://gakuiryugaku.net/mp/mentor/login.php>

編集後記

米国大学院学生会の Facebook ページができました。 <http://www.facebook.com/gakuiryugaku> こちらのページから「LIKE」「いいね」をクリックして頂くと Wall に書き込みできるようになります!

ポスドクとして10年ぶりに日本に帰ってきております。生まれも育ちも日本ですがこれだけ長い間離れていたあとで一人暮らしを始めると不慣れなことも多くあります。一人でアメリカに渡ったときにも苦労はしたはずなので思い返してみのですが、今の面倒ごとの印象の方が強いのでしょうか、「アメリカにいるときはこんな苦労はしなかった」などと思ってしまう。都合の良いときに都合の良いことだけ思いだす都合の良い頭なのだなと思えます。留学を考えておられる方、留学は苦労も多いですが後になって苦労したことばかり思い出すわけではありません。楽しいものもあると思います。

(辻井)

クォールを突破して丁度一年が経

ち、Ph.D.課程も中盤に差し掛かり始めました。最近では興味の幅が広がり学びたい事が増える一方、プロジェクトも忙しくなり、上手く時間配分をしないとあっという間にPh.D.課程が終わってしまいそうだと焦燥感を覚えています。鉄は熱いうちに打てというので、やりたい事は我慢せず思い存分やりたいものです。

(佐藤)

日本にいた頃は、夜遅くまでぶっ通しで働くのをステータスに感じていましたが、現在のボスは仕事の効率性を上げるライフスタイルを推奨しています。僕の場合、研究が一区切りついたら、リフレッシュとして趣味のトレーニングや読書、カメラなどを楽しんでから、次の作業に最高の集中力で望むようにしています。最

近はカメラ付きドローンを注文したので、春-夏にかけてのキャンパスやミシガン湖の空撮がとても楽しみです。目指せ、仕事も遊びも出来る器用な研究者。(塚本)

北ドイツは晴れの日が少ないので、太陽が出て暖かくなるとすぐに外へ出てアイスクリームを食べよう!となります。少し前は25度を超えたことあり、1週間のうちに4回もアイスクリームのお誘いがありました(僕はそんなにアイスクリームを欲する訳ではないのでほとんどお断りしましたが...)。代わりに、欲しくなるのがアイスコーヒー!待ってましたとばかりにアイスコーヒーを楽しんでいます。次に移動する時はアイスコーヒーが1年中楽しめる所がいいなあなどと考えています(高野)。